

偶然的真理としての物理主義と説明ギャップ (Explanatory Gap)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46332

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



偶然的真理としての物理主義と 説明ギャップ (Explanatory Gap)

美濃正教授退職記念ワークショップ
於：キャンパスプラザ京都

金沢大学教育担当理事(副学長)
柴田正良 Aug. 27, 2016



話の流れ

1. 説明ギャップを無理に埋める必要はない
2. 行為者の一人称的世界、夢世界、BIV世界
3. ほどよい強さのスーパーヴィーニエンス(SV)
4. <偶然的真理としての物理主義>と行為者

説明ギャップ(EG)

- 物理学的現象から、化学的現象、分子生物学的現象、生理学的現象へと、「なぜ上位の現象が下位の現象から生ずるのか」に関して、科学的説明は切れ目なく答えを与えるように見える。
- しかし、脳過程の現象がいかにして「レモンの色の感じ」を生み出すのかは、脳過程の説明をいくら精緻にしても、それによっては理解できない。両者の間には、物理学的・神経生理学的説明では埋められないギャップ(EG)があるように思われる。

還元的物理主義の戦略

- ・脳過程と心的経験を、2つの別々の現象と考えずに、同一の現象と考えよ。



そうすれば、埋めるべきギャップは元から存在していなかったことになる。

この戦略が有効なのは、意識や心の機能的な働き（機能的意識）に対してである。現象的意識は、機能化できない限りにおいて、この還元的同一化に回収できない。



内在的質としてのクオリア (J. Kim の場合)。

無理に同一性を求めなくてもいいだろう

2つの点で、同一性に訴えるのは無理がある。

1. 「脳過程に生じている神経生理学的現象」と「レモンの色の感じ」は、内容上、到底同一とは思われない。両者が帰属される個体としての脳は同一でも、両者は、脳がもつ2つの異なった性質だと考えた方が自然である。例えば、脳の「重さ」と「皺の数」は、同一の性質ではなからう。

2. もっと大事なことに、脳が生じさせる「一人称的な世界」の特異性が、同一化では消し去られている。三人称的な世界の中に存在する、それに回収不可能な特異点、「一人称的世界」、それこそが、三人称的世界に行為者が出現するための必要条件だ。

行為者の一人称的世界S

- 脳に対する三人称的アクセスは科学的記述だが、一人称的アクセスは、「**脳が生み出す世界を生きること**」だろう。
- 行為者は、たんに三人称的に他から特定可能な認知行動能力をもっているだけでなく、**一人称的な「世界への視点」**を持っている必要がある。持っていないければ、それはただの物理的な塊にすぎない。それは、「**物理世界への通路**」であると同時に、行為者Sにとっての「**世界S**」である。
- 夢を見ている人物の「**夢世界D**」を考えてみよう。傍らにいる人々にとって、世界Dに存在する**事物**は物理的実在性を持たず物理的に存在しない。では、**世界Dも？**

夢の世界はどう？

物理世界

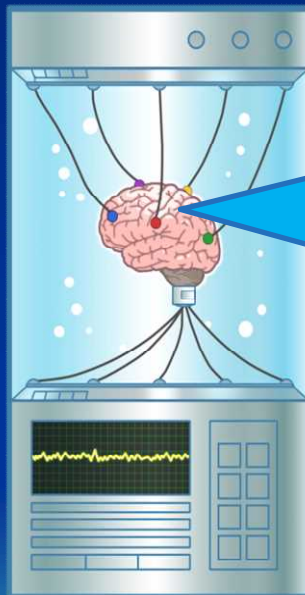


夢世界D



Brains in a Vat の世界は？

物理世界

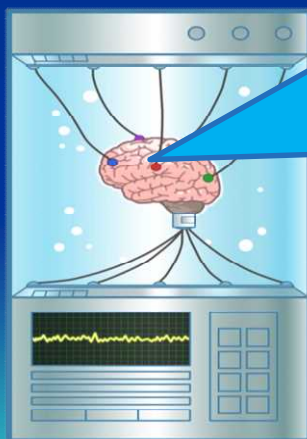


BIV世界

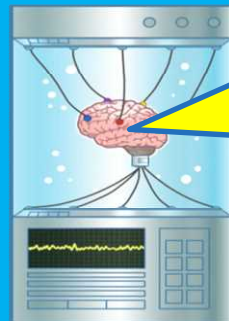


まあ、これもあり？

物理世界



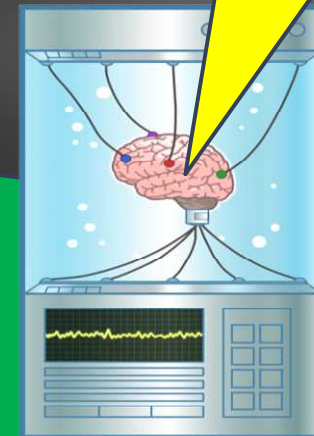
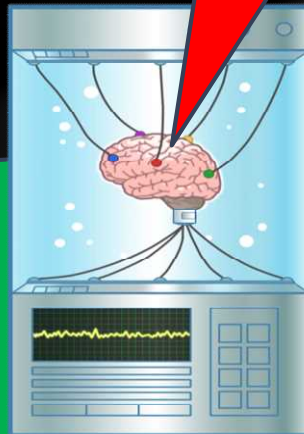
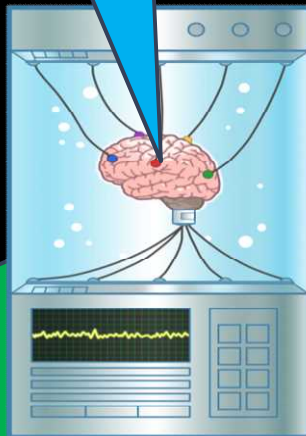
BIV世界B1



BIV世界B2



映画「マトリックス」の世界？



物理世界

行為者の一人称的世界Sは、夢世界DやBIV世界Bと同じ身分をもつのか？

- 3者は物理世界への恒常的な参照(表象性)という点を除けば、区別されない。すると、脳内の「神経生理学的状態」と脳の持ち主が経験する「世界の内容」を同一だとするのは、明らかに無理がある。一体、世界全体をどうやって機能化するのか？
- しかし、そうなら、行為者はすべてが質的に異なる、各々の「一人称的世界 S_n 」に閉じ込められているのだろうか？

答えは、Yes and No

他人の一人称的世界を自分の世界として経験することはできないがゆえに、各行為者は、厳密には、一つの同じ行為世界を生きていない。しかし、物理世界を何らかの仕方で参照(表象)できなければ、行為者は行為を成功させることができない。それゆえ、行為者は、同一の物理世界に繋留されている。

SVなき物理世界Wの中の行為者たち

行為者世界S2



行為者世界S3

行為者世界S4

行為者世界S1



物理レモン

可能世界Wはどんな物理世界か？

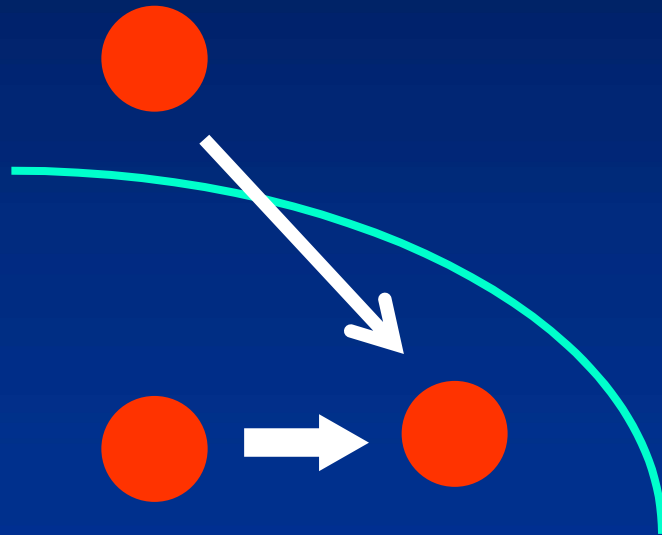
- Wにおいて、行為世界が行為者の内部状態にスーパーヴィー
ーン(SV)しないならば、行為世界は言わば「暴走する」かも
しれない。
- 色の逆転スペクトルどころか、レモンに「鉄の塊」、トマトに「ラ
イオン」を見ることもあるだろう。しかも、対応のデタラメさ
には切りがない。もちろん、行為者の自滅(破壊)が待っている
としても。
- Wにおいて、各行為世界Sが行為者の内部状態にSVするな
ら、なぜこの内部状態(a)に「このレモンの色の感じ」(b)が
対応するのかに関して、物理的説明は不可能であり、不要
である。

説明ギャップ再論

- 可能世界Wにおいて、いわゆる説明ギャップが存在するが、それは、WがSVの成立する物理世界である、ということによって無害なものとなる。説明ギャップは、SV関係が成立している以上、埋めることはできない。
- W内に行為者らしき物理システムが複数存在しているとしてみよう。行為者であるためには、その存在者は、「それらのどれも無い視点」ではなく、「そのどれかの視点」でなければならないだろう。そこから世界を生き、そこに行為者の運命が結びつけられているような視点。
- 行為者が存在する限り、説明ギャップは埋められないものとして存在すべきである。

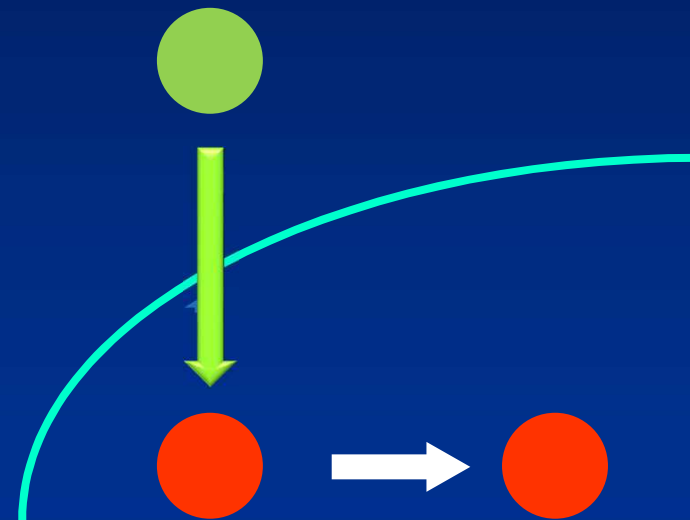
因果関係とSV

因果関係(出来事)



過剰
決定

SV関係(性質)

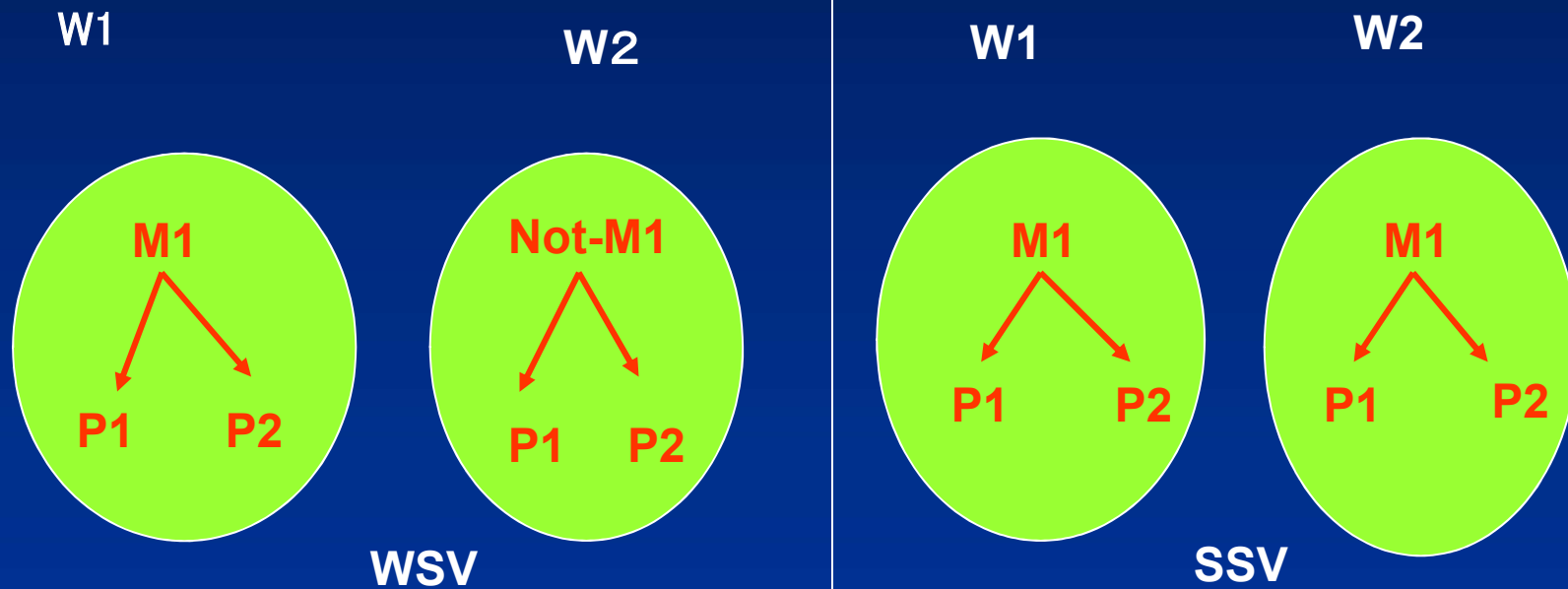


スーパーヴィーニエンス (SV)

- スーパーヴィーニエンス (SV) とは性質間の連動関係、もしくは連動的な依存関係のことである。
- (非還元的) 物理主義の主張  心的性質・現象的意識は物理的性質にSVする。
- 身体物体の完全なコピーは心／意識の完全なコピーだ (SVの主張)

<弱いSV>と<強いSV>

SVの強さは、必然性の度合いを表す



SVの成り立つ可能世界の範囲

- ・ <弱いSV>と<強いSV>の違い



スーパーヴィーニエンス関係（例えば、C繊維の興奮と痛みの感覚）が**ある可能世界内部**で成立すればいいのか、それとも**任意の可能世界相互にまたがって成立する**のか、という違い。



- ・ 物理主義は、<弱いSV>の主張では意味がない

<ほど良く強いSV>

- しかし、<弱いSV>よりも強く、<強いSV>よりは弱いSVが存在するだろう。そして、これこそがわれわれの主張だ。
- それは、ある可能世界でのみ成立する(たんなる偶然性)のでもなく、あらゆる可能世界で成立する(無条件の必然性)のでもない。
- われわれの自然法則がそうであるように、それはある範囲の可能世界群で成立する関係(弱い必然性)だ。  偶然的真理としての物理主義。
- SVが真に根源的關係なら、そのSVがなぜしかじかの範囲の可能世界で成立するのかについての、還元的説明は存在しない。

性質二元論的物理主義 (現実世界という可能世界)

- 偶然的真理としての物理主義

➡ あらゆる可能世界から成る論理空間の中を、次のような可能世界群が棲み分けている。

(A) 実体一元論と性質一元論が成り立つ可能世界群。例えば、それは、物理的な個体と物理的な性質のみが存在する可能世界群である。

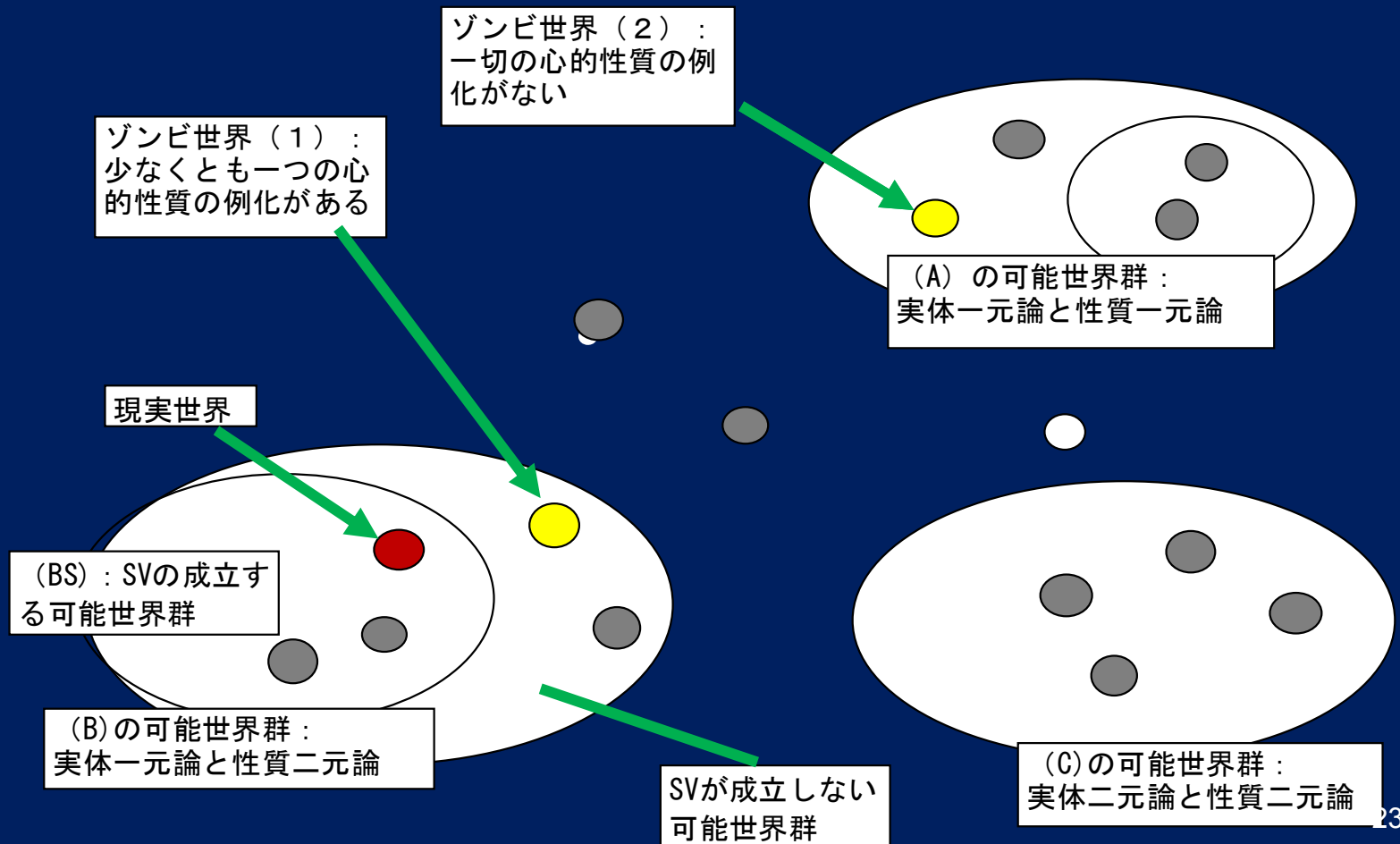
性質二元論的物理主義（1/2）

- (B)実体一元論と性質二元論が成り立つ可能世界群。これらの世界では、例えば、いかなる心的個体も物理的個体と同一だが、いかなる心的性質も自然な物理的性質と同一ではない。
- (C)実体二元論と性質二元論が成り立つ可能世界群。これらの世界では、例えば霊的実体がいかなる物理的個体とも同一ではないものとして存在し、かつ、いかなる心的性質も自然な物理的性質と同一ではない。

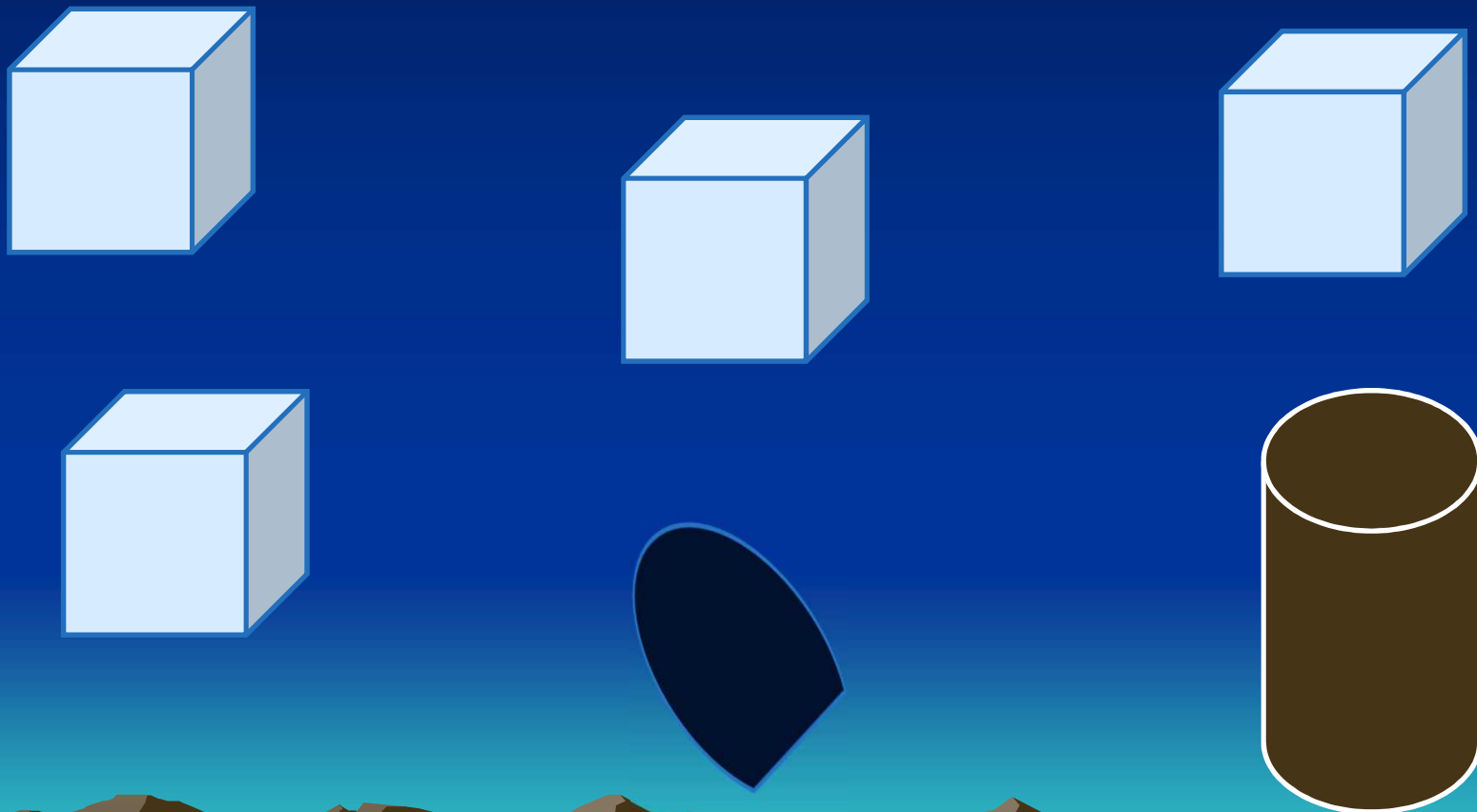
性質二元論的物理主義 (2/2)

- (B)の可能世界群の内部には、さらに、心的性質が物理的性質にスーパーヴィーンする**可能世界群(BS)**と、そのスーパーヴィーニエンスが成り立たない可能世界群(B-BS)を区別することができる。
- 私が提案している性質二元論的物理主義：
現実世界はこの(BS)の可能世界群に属する

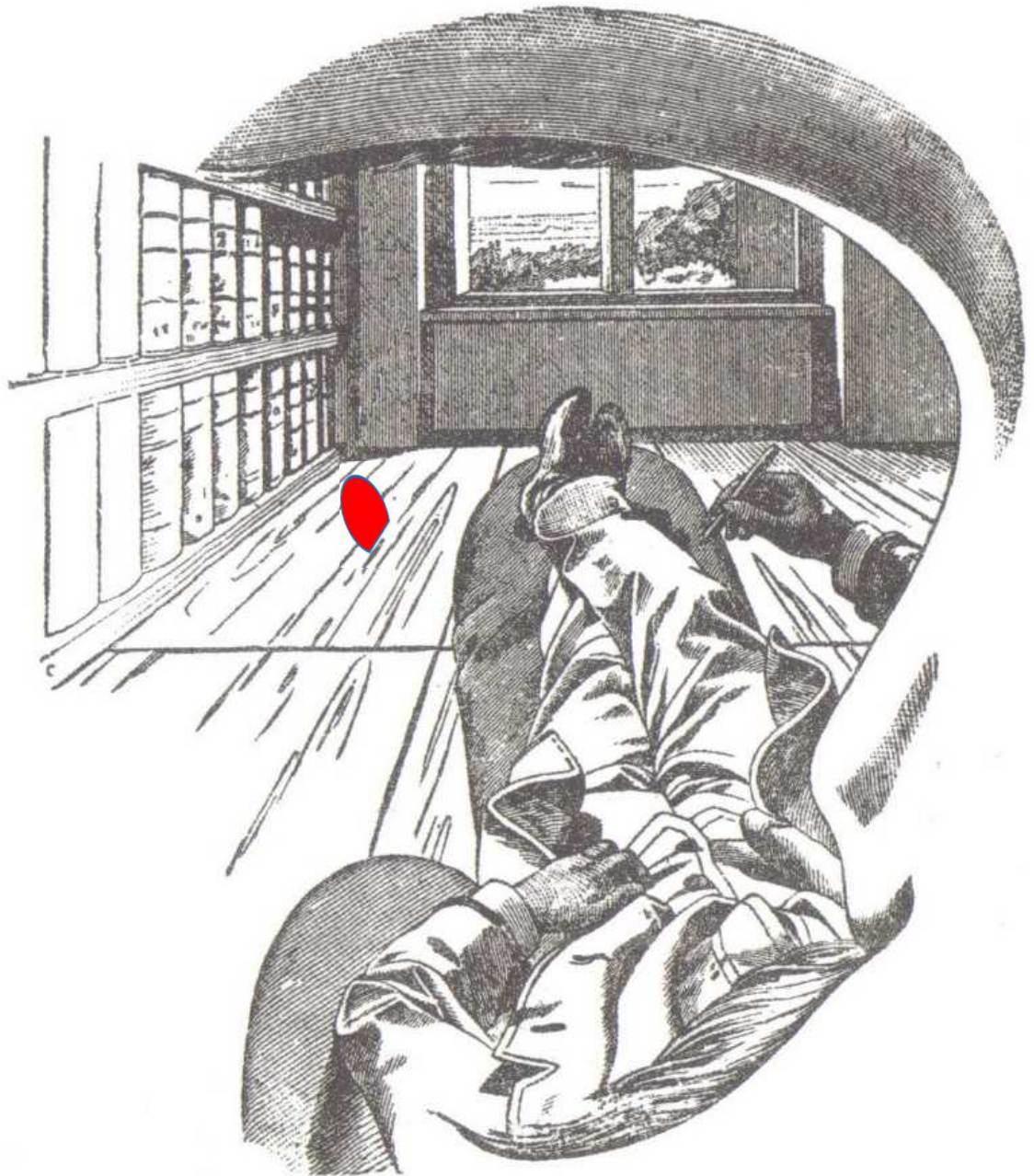
性質二元論的物理主義から見た現実世界の位置



「視点」のない三人称的物理世界
あなたは自分がどの行為者であるかを
この状況から選べるわけではない



赤いレモンの
あるあなたの
行為世界



結論らしきもの（1/2）

- 現実世界を「SVの成立する物理主義的世界」とする**非還元主義**と、「同一性が成立する物理主義的世界」とする**還元主義**は、いかなる科学的説明によっても、またいかなる哲学的論証によっても、真偽の決着は付かないだろう。
- しかし、非還元主義は、「**何らかの仕方で自己接続する特異な物理システム**」という存在者、すなわち、三人称的物理世界に出現する「**行為者**」という特異点が、**説明ギャップ**を必要とする、という点を明らかにする。

結論らしきもの（2/2）

- 「視点をもたない物理システム」は行為者ではない。ある視点からすれば、他の視点に開かれている一人称的世界は、文字通りにはアクセス不可能である。
- SVの成立を前提するなら、一人称的世界が法則的に生じることが保証されているが、どの行為者にとっても、他の一人称的世界はどうあっても「侵入不可」であり、「共有不可」である。
- 行為者世界の、この絶対の「侵入不可」と「共有不可」に、行為の「責任と自由」が宿り、「moral luck」の介入する余地が生まれる。
- ダイレクトな同一性関係によっては物理世界に回収できない行為者世界の存在。現実世界は、それを許容する物理主義的世界である。

おしまい

柴田の研究関連webサイト
<http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/>